

英語進行形の近未来を表す用法と「瞬間」

星野真博

Abstract

In this article, I argue that the use of the English progressive known as *futurate* should be predicted not by the verb types, as is often argued in preceding theories, but by the aspectual feature of “punctuality,” or moment. Since the *futurate* use of the English progressive does not represent the actuality of the event a verb denotes, we can claim that it is not a semantic variant of the verb meanings, but rather a pragmatic expansion. To be more specific, although the basic meaning of the English progressive “limited duration” is still preserved in futurate use of the progressive, it is not the events the verbs denote but the elements outside the meaning of the verbs, such as expectations, plans, or anxiety, that have the limited duration. In addition, for the purpose of making the prediction more reliable, I propose adopting the event structure template containing “punctual” markers, which has been maintained in my previous study (2008).

キーワード…… 進行形 未来用法 語彙概念構造 「瞬間(punctuality)」

1 はじめに

英語の進行形がさまざまな意味を表すことは今までも多く指摘されてきた。その中で、進行形でありながら、実際はその動詞が表す事象が進行中でない用法が存在する。Leech(2004:61)では「未来用法(futurate)」と呼ぶ用法がそれにあたる。

- (1) a. She's *getting* married this spring.
(彼女はこの春、結婚する)
- b. The Chelsea-Arsenal match *is being* played next Saturday.
(チェルシー対アーセナルの試合は次の土曜に行われる)
- c. We're *having* fish for dinner.
(夕食に魚を食べることになっている)

- d. I'm *inviting* several people to a party.
(あるパーティーに数人招くことにしている)
- e. When *are* we *going* back to France?
(いつフランスに帰るの) (Leech 2004:61)

これらの用法はまだ起きていない事象を表す用法であり、「進行中」の用法のように実際に動詞の表す事象が行われているわけでもなく、「繰り返し」や「習慣」の用法のように動詞の表す事象が基準となる時間の前後に行われているわけでもない。

本稿では、「到達動詞の進行形がこの意味を持つ」という従来の説明を批判的に検証し、文中の「瞬間」の要素の有無がこの意味の決定に重大な役割を果たすということを主張する。また、この未来を表す進行形は、進行形本来の意味である「限定的持続」の意味が動詞の意味成分に直接結びつくものではなく、期待・計画・意思などの動詞が本来持っていない言外の成分と結びつく語用論的な拡張用法であり、動詞の意味と密接に関連のある「進行中」の意味とは別にすべきであると論じる。動詞句の意味における「瞬間」の表示については星野(2008)で提案している語彙概念構造の表示法を用いることで、この表示の妥当性をさらに実証することにする。

2 動詞分類による説明は妥当か

「未来」を表す進行形の用法がどのような場合に生じるかということに関しては、しばしば Vendler(1967)の動詞分類による分析が言及される。この分析では動詞は「状態(states)」「到達(achievements)」「活動(activities)」「達成(accomplishments)」に分類されるが、分類する際のテストの一つとして、進行形の可否がある。このテストによれば、時間的制限に縛られない状態を表す状態動詞の場合、進行形にすることはできない。非状態動詞で、時間的な終点を持ち、持続時間を持たない、(もしくはほとんど持たない)事象を表す動詞は到達動詞であるが、その進行形は通常の進行形の「～している」という意味ではなく、ここであげている「未来用法」にあたる「～しかけている」という意味になる。その一方、非状態動詞で時間的終点を持たず、ある程度持続時間がある事象を表す活動動詞と、何らかの「活動」の結果、ある時間的な終点に達する事象を表す達成動詞の進行形の場合は、通常の「～している」という意味になる。しかし、現実的には、この分析で全ての現象を説明できるとは言いがたい。

まず、注意しなければならないのは、「未来」用法にもいくつかの変種があることである。Quirk et al.(1985)は未来を表す進行形として次のような二つのタイプをあげている。

- (2) a. The train *is arriving* at platform 4.
(列車が4番ホームに(これから)到着するところだ)

- b. *I'm stopping* the car at this garage.
 ((これから)車をガレージに止めるところだ) (ibid: 209)
- (3) a. The orchestra *is playing* a Mozart symphony after this.
 (楽団はこの後でモーツァルトの交響曲を演奏する予定だ)
- b. The match *is starting* at 2.30 tomorrow.
 (試合は明日 2 時半に開始する予定だ)
- c. *I'm taking* the children to the zoo on Saturday.
 (土曜日に子供を動物園に連れて行く予定だ) (ibid: 215)

Quirk et al.(1985)によれば、(2)の進行形で表される意味は「予期的 (anticipatory)」な解釈であり、実際に目前で起こりそうな事象に適用される用法である。それに対し、(3)の進行形が表す意味は、「現在の準備、計画、プログラムから生じる未来」を表す用法と説明されている¹⁾。(3)の場合、予定されているならば、実際目前で起こる必要はない。ここでは(3)のような用法を「予定的」解釈と呼ぶことにする。Quirk らによれば、例えば *I'm leaving* のような文の場合、「(すぐに)出発する」という予期的解釈と「出発する予定がある」という予定的解釈の両方があるが、*The old man is dying* には「その老人は(目前で)死にそうだ」という予期的解釈はあるが、「その老人は死ぬ予定だ」という予定的解釈は普通ではないとある(ただし、この文は第三者の関与を含む特殊な予定的解釈を持ちうる。詳細は第3節)。このことから、予期的解釈と予定的解釈は、成立条件の異なる別の用法であると考えてよい。通常、予定的解釈はこのようないまいさを避けるために(3a-c)に含まれる *after this, tomorrow, on Saturday* のように未来を表す副詞句を含んでいる。予期的用法の場合は特に副詞句を含まなくてもその意味になるとされている。このことについては本論でさらに検討することにする。

では Vendler の分析に従って(2)-(3)を見てみよう。(2a)、(3b)の動詞句二つは「非状態動詞で時間的な終点を持ち、持続時間をほとんど持たない」という点で典型的な到達動詞であり、問題ではない。しかし、(2b)(3c)の動詞句は主語の「ある活動」の結果として「ある時間的終点」へと向かう達成動詞であり、(3a)の動詞句は「非状態動詞で時間的な終点を持たず持続時間を持つ」という点で活動動詞である²⁾。Vendler の分析どおりなら進行形は「～している」の意味になるはずであるが実際はそうっていない。

(4)に示すように、一般的に、未来のある一時点を表わす副詞を加えて予定的解釈を取る進行形を作る場合、活動動詞や達成動詞でも比較的容易に共起する。

- (4) a. *I am running* tomorrow.
 (明日、走る予定です)

- b. We *are building* our house next month.
 (来月、家を建てる予定です)

この事実から、未来用法でも予定的解釈に関しては動詞の分類とは直接関係しないことが見て取れる。

一方、ほとんどの場合、到達動詞の進行形は予期的解釈になる。だが、予期的解釈の場合でも、条件がそろっていれば到達動詞以外でもこの意味になることがある。(5)の例の *punt* は活動動詞であるが、実際にフットボールの試合を観戦中ならば次のように言うこともできる。

- (5) Gee! That jerk *is punting*!
 (*あーあ、あのうすら馬鹿がパンツ蹴っているところだ)
 (あーあ、あのうすら馬鹿がパンツ蹴るぞ)

さらに、時間的終点があり、活動を含まない事象を表す到達動詞でも、進行形が予期的解釈にならない場合もある。

- (6) The leaves *are turning* red.
 (紅葉していく途中だ)(*もう少しで紅葉する)
 cf. The traffic light *is turning* red. (もうすぐ信号が赤になる)

以上のことからわかるように、進行形の未来を表す用法の分析として、動詞分類で説明することには限界があるといえよう。

3 「進行」しているのは何か

未来用法の説明に入る前に、まず、進行形の本来の意味について再確認しておく必要がある。前述の Quirk et al.(1985)や Leech(2004)は進行形を「持続(duration)のある出来事」「限定的(limited)持続のある出来事」「必ずしも完了している必要の無い出来事」と定義している。つまり、ある限定された持続時間のある事象が起きている最中であることを強調し、完了までは含意していないことを表しているのである。

私は一連の進行形に関する研究、Hoshino(2007)、Hoshino(2008)、星野(2008)で、進行形の基本的意味は「限定的持続」であり、様々な用法は全てこの基本的意味とその他の要素で合成的に導き出せると一貫して主張している。よって、この未来用法も、同様に、何かが「限定的持続」を持っていると考えている。平易に言えば、「限定的持続」とはある時点で「～している」

ことであると考えてよい。つまり進行形の解釈でいう「進行中」である。例えば、次のような場合は動詞が示す出来事が実際に限定された持続時間を持って「進行中」であるといえる。

- (7)
- a. The wind *is blowing* hard.
(風が強く吹いている)
 - b. The children *are playing* chess.
(子供たちがチェスをしている)
 - c. The weather *is getting* warmer.
(天気が悪くなってきている)
 - d. You *are looking* tired this evening.
(君、今晩は疲れて見えるよ)
- (Quirk et al. 1985:200-218)

これらの用法の場合、進行形の本来の意味である「限定的持続」が動詞の持つ意味内容に直接結びついていることになる。このように動詞の持つ意味内容が「限定的持続」の最中にある(つまり「進行中」にある)ような用法を、私はこれまでの一連の研究でグループ と分類している。このグループ の解釈には(7a)(7b)のような「進行中の現象・動作」、(7c)のような「変化の過程」、(7d)のような「一時的状態」などが含まれる(Hoshino 2007)。動詞で示されている出来事が実際に起きている実在性(actuality)という点では、このグループの用法は必ず実在性を持っている。

しかし、次にあげるような動詞の場合、「限定的持続」を持っているのは必ずしも動詞が示す出来事ではないといえる。

- (8)
- a. Downstairs, a door *was banging*.
(下でドアがバンバン音を立てていた) (Quirk et al. 1985:208)
 - b. John *was nodding* his head.
(ジョンは何度もうなずいていた) (ibid.)
 - c. I'm *taking* dancing lessons this winter.
(私はこの冬はダンスレッスンを受けている) (Leech 2004: 32)
 - d. Many children *are dying* of malnutrition every year.
(多くの子供が毎年栄養失調で死んでいる)

(8a)-(8b)の動詞 *bang* と *nod* はそれが示す出来事 1 回には持続時間が含まれていない、瞬間的に終わってしまう活動である。(8c)の *taking dancing lesson* は出来事自体、持続時間を持っているが、(7)の用法と大きく異なるのは、現在形でありながら、実際にレッスンを受けていない場面

でも発話ができることである。つまり、繰り返しダンスのレッスンをしているが、発話の時点でレッスンを受けているとは限らないのである。(8d)については *die* という動詞自体も持続時間を持っていないし、今この場で実際に子供が死んでいるかどうかはわからない。ここにあげた例はどれも、動詞の意味内容に「繰り返し」の要素が加わることで「限定的持続」を持つタイプであり、私は一連の研究でこれらをグループ と分類している(Hoshino 2008)。この場合、動詞の示す出来事の実在性は、何度も繰り返されているという解釈を持つことで、間接的ではあるが存在することになる。

では、未来用法ではどうだろう。結論から先に言えば、未来用法には実在性はない。今この場で実在していないことを表すから未来用法なのである。実在していない以上、動詞の示す出来事自体が「進行中」ではないことがわかる。このことから、私の一連の研究では、未来用法を語彙意味論上の変種というよりは語用論的変種であると位置づけ、グループ と分類している。それでは一体、何が「限定的持続」を持っているのだろうか。前節で、未来の一時点を表す副詞句がつく場合、比較的容易に予定的解釈ができると述べたが、実際にはいくつかの制限がある。ここにまず第1の鍵がある。

Leech(2005:62)は、進行形の表す未来は他の未来を表す用法と意味内容に差があることを指摘している。

- (9) a. *I'm going to take* Mary out for dinner this evening
(メアリーを今晚、夕食に連れて行くつもりだ)
b. *I'm taking* Mary for dinner this evening.
(メアリーを今晚、夕食に連れて行くことになっている)

(9a)の *be going to* を使った未来は「意図」を表すが、(9b)の進行形を用いた未来の場合は「手配された予定(arrangement)」を表しているという。このように進行形の未来用法の予定的解釈では「人為的な手配」が必要となるため、例えば *I'm watching TV this evening.* のような文は「何人かのサッカーファンが集合して自分のひいきのチームの試合をテレビで見ようという計画がある」というような特別な場面が設定されていない限り容認可能ではなくなると Leech は指摘している。同様に、人為的に手配できない出来事にも予定的解釈が許されないことになる³⁾。

- (10) a. John's *getting* up at 5 o'clock tomorrow.
(ジョンは明日、5時に起きる予定だ)
b. *The sun *is rising* at 5 o'clock tomorrow.
(太陽は明日5時に昇る予定だ)

- (11) a. It *is going* to rain tomorrow.
(明日は雨になりそうだ)
- b. *It *is raining* tomorrow.
(明日は雨になる予定だ)

さらに、柏野(1999:77-78)によれば、予定的解釈の進行形の出来事を手配するのは一般に文の主語であるが、三人称主語の場合は文の主語以外(話し手が第三者)が手配をしていることが示されるという。

- (12) a. He *is dying* next week.
(彼は来週、処刑される)
- b. The tickets *are going* on sale next week.
(切符は来週発売される)
- c. He *is being met* at the station tonight.
(彼を今晚、駅に迎えに行きます)

これらの事実から言えることは、進行形の未来用法は単に時間的な未来を表しているのではなく、何かしら追加の意味を持っていることである。予定的解釈の未来用法の場合は、この追加の意味は「手配された予定」であり、動詞の表す意味内容が「持続的限定」を担っているのではなく、ある未来の一時点までの「手配された予定」という追加の意味が「持続的限定」を担っているのである。

それでは予期的解釈の場合はどうだろう。これについては、ある未来の出来事が起こる兆候が目前にあるかどうか鍵となる。第2節で述べたように大部分の到達動詞は副詞句を伴わずに予期的解釈を持つことができる。しかし、次のように時間以外を表す副詞を伴うと、予期的解釈ではなく予定的解釈になることがある。

- (13) a. The aeroplane *is landing*.
(飛行機が(まもなく)着陸する) 予期的解釈
- b. The aeroplane *is landing* at Amsterdam.
(飛行機はアムステルダムに着陸する予定だ) 予定的解釈
(Leech 2005: 63)

同様のことが(5)の *That jerk is punting*.にもいえる。(5)の説明で、「実際にフットボールの試合を観戦中なら」と但し書きを入れたが、もし何も背景がないならば、この文は「あのうすら馬鹿

はパントを繰り返している」という繰り返しの解釈が成り立ち、「今これから蹴ろうとしている」という解釈は出てこない。これらの事実から言えることは、予期的解釈は目前に起きているものを見て、「今はまだ発生していないが、確実に発生するという予感」がある場合に使われる用法である。この場合も動詞で示されている出来事自体が「限定的持続」を担っているのではなく、この「確実に発生するという予感」が「限定的持続」を担っているといえよう。

このように未来用法において進行形の持つ基本的な意味が動詞自体の意味成分に直接結びついていないことは、英語の進行形と似た意味を持つ日本語の「～テイル」形ではさらにはっきりした形で観察される。日本語の「～テイル」形は英語の進行形同様、基本的には動作や変化が「持続」しているあることを表し、英語の進行形にほぼ相当する表現といってよい。しかし、日本語の「テイル」形で未来の事象を表す場合は、動詞に直接「テイル」を付加するだけでは不十分であり、必ず「～ことに～」など別の要素を挿入しなければならない⁴⁾。

- (14) a. *私は明日、歌っている。
b. 私は明日、歌うことになっている
c. *選手が(これから)スタートしている。
d. 選手が(これから)スタートしようとしている。

以上をまとめると、私がグループと呼んでいる未来用法の進行形は、進行形の基本の意味である「限定的持続」が動詞の意味要素に直接結びつくものではなく、「人為的に手配された予定」や「目前の出来事から感じられる予感」のような語彙以外の要素に「限定的持続」を結びつける語用論的な用法であるということである。

であれば、どういう場合に進行形が未来用法になるのかを説明するには、単なる動詞分類だけではうまくいかないことがわかる。未来用法で最低限必要とされるものは「持続時間」を持つ「予定」や「予感」などの動詞外の要素の有無と、未来のある一時点である。この一時点は動詞内にあってもかまわないし、副詞で表してもかまわない。だがこれらの動詞外の要素と未来の一時点がなければ未来用法の解釈は不可能である。既存の「到達動詞の進行形は予期的解釈を表す」という説明は、たまたま到達動詞の多くがその語彙意味構造の中に「瞬間」という一時点を有するために一見成立しているように見えるだけで、実際は(13)の事実でわかるように「予感」の要素がない場面においては正しいとはいえない。たとえ到達動詞であっても所定の動詞外の要素がなければ未来用法として成立しないのである。逆に、動詞外の要素があっても未来の一時点が示されなければ未来用法を意味しない例が(6)の *The leaves are turning red* などの動詞の場合(他には *worsen, melt, rot* など)である。これらの動詞はどれも、推移的な変化を表しており、その語彙概念構造内に「瞬間」を持っていないので、たとえ目前に兆候があったとしても未来用法としては解釈されない。

Vendler の説明では触れられていない、(5) *Gee! That jerk is punting* などの活動動詞（他には *jump*、*hit*、*hop* など）の予期的用法についても、これらの動詞が semelfactive 動詞（Engelberg 1999 他）という「瞬間」の要素を語彙概念構造中に持つ動詞であることから説明ができる。

I'm leaving (soon/tomorrow) のような、副詞がないと予期的解釈になるか予定的解釈になるかはっきりしない場合はどうだろう。動詞 *leave* は到達動詞として、語彙概念構造中に「一瞬」を含むため予期的解釈が可能である一方、同時に意志を持って行える活動でもあるため「予定」という語彙外の要素を持ちうる。その結果、予期的解釈と予定的解釈の両方が可能になるため、動詞だけではどちらの用法が判断できない。そのため副詞で未来のある時点特定する必要があるのである。

予定的解釈の場合、たいてい未来のある時間を表す副詞を含むが、その場合はもちろんその副詞が未来の一時点を示している。(13b)の *The aeroplane is landing at Amsterdam* の場合は、未来を表す副詞句はないが、*land* という動詞が到達動詞であり、その動詞の中に「瞬間」を表す一時点が存在しているので未来用法が可能になる。予定的解釈になるのは、予期的解釈に必要な「目前で起きている」という条件が当てはまらないからである。

このことをさらに深く検討するために、次節では星野(2008)で提案している語彙概念構造を用いて、さらにこの用法の成立条件について探っていく。

4 語彙概念構造と「瞬間」

本論はここまで述べてきたとおり、「到達動詞の進行形が未来用法になる」という立場を取っていない。しかし、前節で述べたとおり、副詞を取らずに予期的解釈ができる動詞のほとんどが到達動詞であることも事実である。この節ではなぜ到達動詞が予期的解釈を取りやすいのか、また、到達動詞でなくても予期的解釈が可能な動詞があるのはなぜかを語彙概念構造を用いて説明していく。

Vendler の動詞分類はこれまで広く言語分析に用いられ、また様々な修正を受けてきた（その推移は Levin and Rappaport Hovav 2005: 88 で詳しく説明されている）。このため研究者によって細部が異なることはあるが、本来の Vendler 流の分析では以下のように動詞を分類していた。まず動詞は状態動詞と非状態動詞に分類される。非状態動詞はさらに、時間的終点を持つかどうか（atelic か telic か）で分類され、さらに時間的終点を持つ(telic)の動詞は持続時間を持つかどうかで分類される。時間的終点を持たない(atelic)非状態動詞が「活動動詞(activities)」、時間的終点を持ち(telic)、かつ持続時間を持たない非状態動詞が「到達動詞(achievements)」、時間的終点を持ち(telic)、持続時間を持つ動詞が「達成動詞(accomplishments)」である。

しかし、この分類には当てはまりにくい動詞がいくつか存在する。例えば、活動動詞でありながら、持続時間を持たない *knock*、*kick*、*jump*、*beep* のような semelfactive 動詞（Engelberg

(1999)、Smith (1991)らの用語) がその1つである。これらの動詞の進行形は活動動詞から予想される「～している」という進行中の意味ではなく、「繰り返し」の解釈になる。また、Vendler の分類は語彙的使役動詞 (causatives) の分析にも広く用いられ、多くの研究で達成動詞と語彙的使役動詞の共通性が言及されてきた。しかし、厳密に「瞬間」の有無だけで達成動詞か到達動詞かを分類すると、語彙的使役を含む他動詞の中で *smash* のような持続時間を持たない動詞は到達動詞に、語彙的使役を含まない自動詞の中で *turn* や *rot* のような持続時間を持つ動詞は達成動詞に分析されることになり、観察事実と矛盾する結果となる。

このように Vendler の問題点は、「瞬間」を動詞の分類基準に置いていることで逆に説明がつかなくなる現象が存在することである。星野(2008)では、動詞の「持続時間」、言い換えれば「瞬間」を動詞の分類の基準に置くのではなく、語彙概念構造内の特異要素 (idiosyncratic element) として捕らえている。動詞が時間的の終点を持つか持たないか (telic であるかどうか) はその動詞が要求する項を決定する上で重要であり、構造的要素 (structural element) であるが、「瞬間」の有無は相的な特徴を表記するだけで、項実現との直接的な関係はないからである。(特異的要素、構造的要素については Rappaport Hovav and Levin 1996, 1998)

ここで簡単に星野(2008)が提案している語彙概念構造について説明したい。語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以下 LCS) とは、動詞の意味を述語分解によって基本単位に分解し、その意味単位を用いて語彙意味の構造関係を表す表示のことである。前述の通り、動詞意味は項実現に関係する構造的要素と、構造とは直接関係のない意味の差異に関わる特異的要素に分けられる。構造的要素は ACT、CAUSE、BECOME といった基本述語 (primitive predicates) の形で表される。ACT は非状態で時間的の終点を持たない事象を表す基本述語であり、必ず外項を一つ取る。影山(1996)の提案を採用すれば、ACT が表すのは非能格事象であるともいえる。その一方、BECOME が示すのは時間的の終点を持つ事象であり、必ず直接内項を取る。同様に影山の言葉を借りれば非対格事象を表しているといえる。CAUSE は使役関係を表し、項として起動事象と結果事象をとり、典型的には ACT が示す非能格事象を起動事象とし、BECOME が示す非対格事象を結果事象とする (無生物主語構文のように起動項が事象でない場合もある)。Rappaport Hovav and Levin(1996; 1998)は基本述語の典型的組み合わせを事象構造鋳型 (Event Structure template) と呼び、それぞれを Vendler の分類と関係付けているが、これでは前述の Vendler 分析における「瞬間」の扱いに関する問題をそのまま受け継ぐことになってしまうため、ここではこの関連付けを否定する。つまり、構造的要素の組み合わせだけで瞬間の有無は表すことができないこととする。

それに対し特異的要素は RH&L に従うと角括弧付きの大文字斜自体で示される。ここで示される意味内容はその動詞に固有の情報であり、「定項」と呼ばれる(ただし、Levin ら本人は Levin and Rappaport Hovav (2005: 71)で、Pesetsky (1995)で使われている「根(root)」という用語が今、受け入れられている用語であるとしている)。定項が示すのは ACT の様態、手段、BECOME の

結果状態、または状態動詞の示す状態である。星野の提案は、手短に言うと動詞の分類や事象構造類型が「瞬間」を示すのではなく、特異的要素が「瞬間」を示すというものである。具体的には「瞬間」のある事象には(punctual)という素性を与えている。具体的に(2)-(3)の例文を基に表示例を書いてみよう。(15)に(2)-(3)と(5)-(6)の例文を再掲し、(16)以降にそれぞれの動詞句の語彙概念構造を示しておく

- (15) a. The train *is arriving* at platform 4.
 b. I'm *stopping* the car at this garage.
 c. The orchestra *is playing* a Mozart symphony after this.
 d. The match *is starting* at 2.30 tomorrow.
 e. I'm *taking* the children to the zoo on Saturday.
 f. Gee! That jerk *is punting*!
 g. The leaves *are turning* red.
- (16) arrive at some place
 [BECOME_(punctual) [x < AT-PLACE >]]
- (17) stop something
 [[x ACT] CAUSE [BECOME_(punctual) [y < MOTIONLESS >]]]
- (18) play something
 [x ACT < PLAY-y >]
- (19) start
 [BECOME_(punctual) [x < ON - GOING >]]
- (20) take somebody to some place
 [[x ACT < TAKE >] CAUSE [BECOME [y < AT-PLACE >]]]
- (21) punt
 [x ACT_(punctual) < PUNT >]
- (22) turn
 [BECOME [x < DIFFERENT STATE >]]

(16)は時間的の終点を含む事象で、基本述語 BECOME と結果状態を表す定項 < AT-PLACE > で表されている(x は直接内項になる変項である)。この事象は「到着する瞬間」を指すので(punctual)の素性を追加してある。(17)は語彙的の使役を含む事象で、語彙使役を表す CAUSE、起動事象を表す ACT、結果事象を表す BECOME、結果状態を表す定項 < MOTIONLESS > から成り立っている(x は外項を、 y は直接内項を表す変項)。この際、結果事象の「静止」状態はそうなる「瞬

間」を示しているが、起動事象の「静止させようという活動」には「持続時間」があることが考えられる。よって結果事象の BECOME のみ (punctual) の素性が追加されている。(18)は時間的終点を持たない活動であり、基本述語 ACT とその様態を表す定項 <PLAY-y> から成り立っている。この活動は持続して行えるので「瞬間」を持たず、LCS 中に (punctual) の素性が追加されていない。(19)は結果状態を表す定項が違うだけで(16)と同型の語彙概念構造をとる。(20)は(17)とほぼ同型だが、「目的地に到着する」までの「持続時間」があるため、BECOME には(punctual)の素性が追加されていない。(21)は繰り返し行える活動であり、時間的終点を持たない事象と分析されている(前述の semelfactive に当たる)ため、基本述語 ACT とその様態を表す定項 <PUNT> から成り立つ。だが(18)とは違い、「パントを蹴る」活動は一瞬で終わる瞬間的な活動であるために punctual 表示が ACT に添えられている。(22)は時間的終点を含む事象で、基本述語 BECOME とその結果状態を表す定項から成り立っているが、(16)、(19)とは異なり、「木の葉が紅葉する」までには「持続時間」があるため、LCS には (punctual) の素性が追加されていない。以上が星野(2008)で提案されている語彙概念構造表示である。

この表示でわかるとおり、従来動詞の分類に用いられていた「瞬間」には、実は ACT に関わる「瞬間」と BECOME に関わる「瞬間」の異なる2つの「瞬間」がある。また、「瞬間」は構造的要素の組み合わせとは必ずしも関係ないことがわかる。よって、前節の最後で述べたように、例え「活動動詞」であっても LCS 中に「瞬間」を持ち語彙以外の条件が満たされていれば予期的解釈が許されることになる。また、例え「到達動詞」であっても LCS 中に「瞬間」を持たなければ予期的解釈が許されなくなるのである。

2つの異なる「瞬間」があることは次の文の多義性からも実証できる。

(23) John *is crushing* the orange.

- i) (ジョンは(これから)オレンジをつぶそうとしている)
- ii) (ジョンがオレンジをつぶして、(もうすぐ)完全につぶれる)

動詞 crush は語彙的使役動詞であり、(17)や(20)と同様、基本述語 ACT、CAUSE、BECOME からなる語彙概念構造になっている。ではここに (punctual) の素性をつけてみよう。「つぶれる」変化は完全につぶれる瞬間を描写するので、BECOME_(punctual)と表示できる。また、一瞬で何かを「つぶす」場合はその活動はやはり一瞬であるので ACT_(punctual)表示も許される。よって *crush* は以下のような語彙概念構造を持つことになる。

(24) *crush*:

[[x ACT_(punctual)] CAUSE [BECOME_(punctual) [y < CRUSHED >]]]

(23i)の解釈は ACT の部分に関わる解釈で、ジョンはオレンジにまだ触れていない状況を示している。つまり、オレンジをつぶす活動に入る「瞬間」を基準として予期的解釈が働いているわけである。その一方で、オレンジが硬くてなかなか瞬間でつぶれないような状況を想定してみよう。この場合、ACT の部分の punctual は実際にオレンジをつぶす活動に費やしている持続時間によって相殺されてしまうため、この「瞬間」を基準にはできない。よって(23ii)のように、オレンジがつぶれる「瞬間」を表す BECOME の部分の(punctual)を基準とした解釈が成り立つことになるのである。

このように punctual の表示を含む語彙概念構造を用いると、動詞分類では説明しきれない *punt* や *jump* のような動詞も包括的に説明でき、また、動詞分類では気づかなかった(23)のような多義性をはっきりと筋道立てて説明できることになる。また、定義の上ではっきりしない部分のある動詞分類と比べても、より精緻な表示ができることもこの語彙概念構造の長所である。

ここで簡単に理論を整理してみたい。

【進行形の近未来用法とその成立条件】

進行形の基本的な意味は「限定的持続」であり、「未来用法」は「未来のある時点」に至るまでの「予感」「予定」などが「限定的に持続」していることを示す語用論的拡大用法である。この用法が成立するには以下の条件が課される。

進行形の未来用法には「瞬間」が表されている必要がある。

動詞句の語彙概念構造中に「瞬間(punctual)」の要素があり、かつ、目前にその兆候がある場合、副詞を伴わずに予期的用法になりうる。

動詞句の語彙概念構造中に「瞬間」の要素があり、目前に兆候がなく、かつ人為的な手配による予定ができる場合、予定的用法になりうる。

動詞の語彙概念構造中に「瞬間」の要素がなくとも、人為的な手配による予定ができるものについては未来の一時点を表す副詞句を伴うことで予定的用法になりうる。

最後に一つ、付け加えておきたい。Hoshino(2007)、(2008)で言及されているように、本来の進行形の意味であるグループ の解釈が可能な場合はグループ の解釈が優先されるのが普通である。その一方で「瞬間」(punctual)が付与されている基本述語はグループ の解釈が妨げられる。それは進行形の基本意味である「持続」と「瞬間」が矛盾する概念だからである。だが、未来という「その場にまだ実現していない」出来事について言及する場合、「その場で持続している」ことを示すグループ の解釈は「偽の命題」ということになる。グループ の解釈ができない「瞬間」を持つ動詞が未来用法で使われるのはこのことが原因であると考えている。

5 検討課題

語彙概念構造についてはまだ様々な提案が出されていて、これといって確定したものはないが、語彙概念構造を用いることで特に有効なのは語彙意味を基にして統語的派生の可否を論じることができることである。Levin and Rappoport Hovav(1995), および、Rappaport Hovav and Levin(1996; 1998)などで論じられている事象構造鋳型(event structure template)の増設の考え方をを使うことで、例えば wipe のような活動動詞が様々な構造を派生することを説明することができる。

- (25) a. Terry swept.
(テリーが掃き掃除をした)
- b. Terry swept the floor.
(テリーが床を掃いた)
- c. Terry swept the crumbs into the corner.
(テリーがパンくずを隅へと掃いた)
- d. Terry swept the leaves off the sidewalk.
(テリーが落ち葉を歩道から掃いて出した)
- e. Terry swept the floor clean.
(テリーが床を掃いてきれいにした)

(Rappaport Hovav and Levin 1998: 97)

(25a)(25b)は時間的終点を持たない活動を表す事象であり、その語彙概念構造は基本述語 ACT のみから成り立っている。それに対して(25c-e)はどれも、目的語の状態変化が時間的終点を持ち、語彙概念構造は基本述語 ACT、CAUSE、BECOME を含む形に拡大されている。

「瞬間」の概念を用いた未来用法の意味予測は、この鋳型増設された語彙概念構造でも適用される。この場合、「掃く」活動を表す ACT はどれも(punctual)を持っていない。また(25c-e)の持つ変化に至る過程も瞬間ではないので BECOME の部分も(punctual)を持っていない。よって進行形はどれも予期的解釈を許さないことが予想され、実際そうなる。

しかし、次の場合はどうだろう。

- (26) a. He's *running* a marathon (/ soon / tomorrow).
(彼が、(/ まもなく / 明日)マラソン走るよ)
- b. He's *running* to the beach (* / *soon / tomorrow).
(彼が(* / *まもなく / 明日) 海岸まで走るよ)

動詞 *run* は単独では時間的終点を持たない動詞であるが、後ろに目的語や終点を表す語句が来ることで時間的な終点を持つことができる。従来分析では(26a)の *a marathon* には、*break* の目的語が持つような、動詞に示される活動から受ける影響(affectedness)がないと見なされ、*run a marathon* は「活動」と分析されることが多かった。だが、実際にはマラソンは時間とともに推移して完了する。このことから Tenny(1994)はこのようなタイプ(他には *play a sonata* など)も「測定(measure)」される目的語を持つ動詞句とし、経路目的語動詞(Path-Object verb)と呼んで、状態変化動詞(Change of state verb)や主題増減動詞(Incremental theme verb)と同様に「測定される直接内項」を持つ動詞と分類している。そこで星野(2008)ではこのタイプも時間的終点があると見なし、次のような使役構造の語彙概念構造を提案している。

- (27) He runs a marathon
 [x ACT < RUN >] CAUSE [BECOME [y < TRAVERSED >]]
 x = he y = a marathon

また、(26b)の場合は前置詞句で終点が表示されているので次のように語彙使役の語彙概念構造を表示することができる。

- (28) He runs to the beach:
 [x ACT < RUN >] CAUSE [BECOME [x < AT-y >]]]]
 x = he y = beach

前置きが長くなったが、(26a)(26b)では、「マラソンが完了する」「海岸に到着」の双方とも瞬間で完了することはありえない。よって鑄型増設された BECOME の部分にも(punctual)がないと分析できるはずである。ここで問題なのは、語彙概念構造中に(punctual)がない以上、理論上では予期的解釈はできないはずだが、(26a)で可能になっているのはなぜであろう、ということである。

もちろん、(26a)の副詞を伴わない予期的解釈は、テレビの中継を見ているとか、現場にいて、スタートラインに立っている様子を見ている、といった目前に兆候がある必要はある。しかし(26b)の場合、そのような状況が仮にあったとしても、「彼が特定の場所をスタートして海岸に向けて走ることが恒例になっている」ような特殊な状況が加わらない限り、容認可能性が限りなく低くなる。

紙面の都合上、詳細は別の機会に譲るが、この場合は *a marathon* という語句自体がイベントとして未来の一時点を表す語句として機能しているのではないかと考えている。このように副詞以外の要素が未来の一時点を表す場合については今後も検討していきたい。

もう一点検討したいことは、特殊な語句を目的語に取るアスペクト動詞の進行形についてである。柏野(1999)によれば、*begin* は進行形にした際にアクチュアリティ(柏野の用語。この論文の用語では実在性)は持たないが、不定詞句を目的語にとる場合はアクチュアリティを持つと解釈されることが多いとしている。

- (29) The baby *was beginning* to cry a little in the other room, but she ignored her.
(赤ん坊が別の部屋で泣き出したが、彼女は無視した) (ibid: 138)

(29)では赤ん坊は実際に泣いている途中であり、*begin* という「瞬間」を持つ動詞がありながらも未来を表す解釈になっていない。

また *stop* も同様で、普通に進行形にした際にはアクチュアリティは持たないが、*why* 疑問文で用いられる場合に限りアクチュアリティを持つとしている。

- (30) Why *is* the bus *stopping* on that corner now?
(いま、どうして曲がり角にバスが止まったの?) (ibid)

私の定義に従えば、(29)(30)はアクチュアリティがあるのでグループ の解釈になる。ではその場合、語彙概念構造上のどの部分に進行形の基本的意味の「限定的持続」が結びつくのだろう。この点については今後詳細に検討する必要がある。また、「瞬間」があるのに未来用法にならないということは何らかの形で「瞬間」が相殺されていると考えられるが、何がそうしているのかについても例を集めて検討してみたい⁵⁾。

<注>

- 1) 実際には語用論的に話し手や主語の「強い意志」や「命令」を表す未来用法も存在する。
 - i) She's *taking* that medicine whether she like it or not!
(嫌でも彼女はその薬を飲むことになっている) 私が飲ませてやる)
(Swan 1995: 212)この場合も進行形が「予定」や「手配」を表していることからの拡大解釈といえるので、今回はあえて別個の説明をしないことにする。
- 2) 動詞句 *play a Mozart symphony* は *The orchestra played a Mozart symphony in 90 minutes.* ということができるので達成動詞として分析することもできる。Tenny(1994)の言葉を借りれば、この動詞(句)は一種の経路動詞に当たるといえる。星野(2008)では経路動詞の語彙概念構造をいわゆる達成動詞と同じタイプの事象構造鑄型で表して分析している。この件については5節を参照のこと。
- 3) (10b)のような表現は学者によっては非文と見なさないものがある(Prince 1982)。この場合、語彙外の要素として「手配できる予定」だけでなくより広い意味の「予定」を許容していると考えられる。実際、(10b)のタイプしか認めないという研究は私の見る限り存在しない。
- 4) 「飛行機が墜落している!」という場合、普通、地面に飛行機の残骸がある場面を思い浮かべるが、自分が当事者として乗っている場合、機首を下げて下降していることに気づいて、まだ落ちていない段

階でこう叫ぶ可能性はある。「今、離陸している」とか「いま、着陸している」もパイロットが無線で管制塔に連絡するような場面では同様にその可能性がある。日本語でも特殊な場合予期的な解釈が可能なのかもしれない。本論では深い言及は避けるが、「墜落する」と似た意味内容の「激突する」や「衝突する」ではなぜこの解釈にならないのは今後の研究課題である。

5) アクチュアリティという点では柏野(ibid)は次の例も挙げている

- ii) a. He's *forgetting* his French.
(彼はフランス語を忘れかけている)
b. I'm sorry, I *was forgetting* you would be away in August.
(申し訳ありません、あなたが8月に出かけられることを忘れて
いました) (ibid: 139)

柏野は a の例文について、まだ完全に忘れていないわけではないという点でアクチュアリティを表さないとしている。しかし、私はこれについては語彙概念構造の分析の点から異論を述べたい。私の分析では forget は「知識があった状態から知識の欠落した状態に変わる」という時間的の終点を持ち、それが行動の結果ではないことから次のような語彙概念構造を想定している。

- iii) *forget*:
[BECOME [x < WITHOUT KNOWLEDGE >]]

ここで注目すべきことは、BECOME が *punctual* の素性を持たないことである。つまり、知識がなくなる変化は一瞬で起きることではなく、段階的になくなることが十分予期されることであり、その意味で、ii)の a. は「変化の過程」を表すグループの解釈、b. は「一時的状態」を表すやはりグループの解釈であり、双方がアクチュアリティを持っていることになる。なお、一時的状態の解釈の場合、*I had forgotten...* という完了形のほうが普通である。

< 参考文献 >

- Butt, Miriam. and Wilhelm Geuder (Eds.). (1998). *The Projection of Arguments: Lexical and Syntactic Constraints*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Engelberg, Stefan.(1999). "Punctuality and Verb Semantics," *Proceedings of the 23rd Annual Penn Linguistic Colloquium, Working Papers in Linguistics 6.1*, Department of Linguistics, University of Pennsylvania, Philadelphia, PA.
- Hoshino, Masahiro. (2007). "A Clue to Ambiguity of the English Progressive." 『英文学会誌』第三十号, 91-12, 新潟大学英文学会, 新潟.
- Hoshino, Masahiro (2008). "On Repetitive Interpretation of the English Progressive," 『現代社会文化研究』第41号, 167-195, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 新潟.
- 星野真博(2008). 「動詞の語彙概念構造の相的表示についてー「瞬間」の扱いをどうするかー」『現代社会文化研究科プロジェクト論集』第3号, 41-60, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 新潟.
- 影山太郎(1996). 『動詞意味論』くろしお出版, 東京.
- 柏野健次(1999). 『開拓社叢書9 テンスとアスペクトの語法』開拓社, 東京.
- Leech, Geoffrey. (2004). *Meaning of the English Verbs Third Edition*. Pearson Education Limited, Edinburgh Gate Harlow CM20 2JE,
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995). *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press, MA.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005). *Argument Realization*. Cambridge University Press, UK.

英語進行形の近未来を表す用法と「瞬間」(星野)

- Pesetsky, David. (1995). *Zero Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Prince, Ellen. (1982). "The Simple Futurate: Not Simply Progressive Futurate Minus Progressive," *CLS* 18, 453-465.
- Quirk, Randolph., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1996), "Two types of Derived Accomplishments," *The Proceedings of the First LFG Workshop*, Grenoble, France, August 1996.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998). "Building Verb Meanings," In M. Butt & W. Geuder(Eds.)
- Smith, Carlota.S. (1991). *The Parameter of Aspect*, Kluwer, Dordrecht.
- Swan, Michael (2005). *Practical English Usage Third Edition*. Longman. London
- Tenny, Carol L. (1994). *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Vendler, Zeno (1967). *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, NY.

主指導教員(福田一雄教授) 副指導教員(秋孝道准教授・大竹芳夫准教授)